令和６年用食用ぎく病害虫防除基準

※農薬散布にあたっては同一成分の連用を避け、ローテーション散布を心がける。
※殺虫剤を散布する場合は、訪花昆虫に対する薬剤ごとの安全使用基準を徹底する。

発　行：ＪＡさがえ西村山
さがえ西村山野菜振興協議会

防除時期	対象病害虫名	RAC	防除方法〔収穫前使用日数／使用回数〕	注意事項
親株管理	（白さび病）			１．無病のうど芽を植え付ける。
挿し芽時	（えそ病）			１．発病株にふれた手で健全株にふれない。
定植前	センチュウ類	8F	バスアミド微粒剤㊧　20～30kg／10ａ（は種又は定植21日前まで／1回）所定量を均一に散布し土壌と混和する。	１．バスアミド微粒剤㊧の登録対象は、ハガレセンチュウを除くセンチュウ類である。
定植時	ネキリムシ類	1B	カルホス微粒剤Ｆ㊧　６kg／10ａ（定植時／１回）を土壌表面散布土壌混和処理する。	
定植時	アブラムシ類	4A	スタークル粒剤　１ｇ／株　但し10ａ当たり30kgまで（定植時／１回）植穴土壌混和する。	
生育期	白さび病	NC,M1 3 3 11 11	ジーファイン水和剤　1,000倍（10ｇ／10ℓ）〔前日まで／－〕 サプロール乳剤　1,000倍（10mℓ／10ℓ）〔14日前まで／５回以内〕 ラリー乳剤　3,000倍（3.3mℓ／10ℓ）〔14日前まで／２回以内〕 ストロビーフロアブル　3,000倍（3.3mℓ／10ℓ）〔３日前まで／２回以内〕 アミスター20フロアブル　2,000倍（５mℓ／10ℓ）〔前日まで／２回以内〕 のいずれかを散布する。	１．ストロビーフロアブルは黒斑病、褐斑病にも登録がある。 ２．ストロビーフロアブル、アミスター20フロアブルは、浸透性を高める効果のある展着剤を加用すると薬害の恐れがあるため加用しない。また、おうとうに薬害があるので飛散しないように注意する。 ３．ジーファイン水和剤は少量の水で希釈すると発泡するので、必ず所定量の水に少量ずつ撹拌しながら加え調製する。 ４．ジーファイン水和剤は、高温時および極端な低温時、湿潤状態が長時間続く場合の散布により薬害を生じる場合があるので使用しない。 ５．ＥＢＩ剤（サプロール乳剤、ラリー乳剤）は耐性菌出現防止のため総使用回数は２回以内とする。
生育期	褐斑病	1 M5	トップジンＭ水和剤　1,500倍（6.6ｇ／10ℓ）〔28日前まで／２回以内〕 ダコニール1000　1,000倍（10mℓ／10ℓ）〔30日前まで／４回以内〕 のいずれかを散布する。	
生育期	うどんこ病	BM2 NC NC	ボトキラー水和剤　1,000倍（10ｇ／10ℓ）〔発病前～発病初期／－〕 カリグリーン　800倍（12.5ｇ／10ℓ）〔前日まで／－〕 ハーモメイト水溶剤　800倍（12.5ｇ／10ℓ）〔前日まで／－〕 のいずれかを散布する。	１．ボトキラー水和剤、ハーモメイト水溶剤は、灰色かび病にも登録がある。 ２．ボトキラー水和剤を使用する場合は以下の点に注意する。 ・予防的に使用する。 ・10℃以上が確保できる施設内で使用する。 ・夏期高温時の使用は避ける。 ・ダコニール1000を使用する際は、ボトキラー水和剤との散布間隔を７日以上あける。 ３．左記の農薬は「野菜類」登録のため、使用にあたっては薬害がないか確認してから散布する。
生育期	アブラムシ類	4A 1B －	スタークル顆粒水溶剤　3,000倍（3.3ｇ／10ℓ）〔７日前まで／２回以内〕 マラソン乳剤　2,000倍（５mℓ／10ℓ）〔３日前まで／２回以内〕 エコピタ液剤　100倍（100mℓ／10ℓ）〔前日まで／－〕 のいずれかを散布する。	１．施設では成虫の侵入を防止するため開口部に寒冷紗を設置する。 ２．カスケード乳剤、ベストガード粒剤はマメハモグリバエにも登録がある。 ３．合成ピレスロイド剤（アーデント水和剤、アグロスリン乳剤㊧、バイスロイドＥＷ㊧）は抵抗性害虫出現防止のため、同一ほ場内における総使用回数は２回以内とする。 ４．アーデント水和剤は、アブラムシ類、ハダニ類、ヨトウムシ類にも登録がある。 ５．合成ピレスロイド剤、ゼンターリ顆粒水和剤、モスピラン顆粒水溶剤㊧、スピノエース顆粒水和剤、アファーム乳剤、カスケード乳剤は蚕に対する毒性が強いので注意する。 ６．エコピタ液剤は薬害を生じる恐れがあるため高温時の散布に注意し、単用散布とする。 ７．スピノエース顆粒水和剤、ディアナ SC は同一成分とみなし抵抗性害虫出現防止のため連用を避ける。 ８．ゼンターリ顆粒水和剤、エコピタ液剤は「野菜類」登録のため、使用にあたっては薬害がないか確認してから散布する。 ９．アファーム乳剤、スピノエース顆粒水和剤、カスケード乳剤は施設栽培のみの使用とする。 10．アザミウマ類の発生が多い場合は、バイスロイドＥＷ㊧ 3,000倍（3.3mℓ／10ℓ）〔７日前まで／２回以内〕を散布してもよい。
生育期	アブラムシ類 アザミウマ類	4A 3A	モスピラン顆粒水溶剤㊧　2,000倍（５ｇ／10ℓ）〔14日前まで／２回以内〕 アグロスリン乳剤㊧　1,500倍（6.6mℓ／10ℓ）〔３日前まで／１回〕 のいずれかを散布する。	
生育期	ミカンキイロアザミウマ（アザミウマ類）	4A 5 5 13 6 15 3A	ベストガード粒剤　２ｇ／株〔前日まで／２回以内〕を生育期に株元散布する。 ディアナＳＣ　5,000倍（２mℓ／10ℓ）〔前日まで／２回以内〕 スピノエース顆粒水和剤　１万倍（１ｇ／10ℓ）〔３日前まで／２回以内〕 コテツフロアブル㊧　2,000倍（５mℓ／10ℓ）〔３日前まで／２回以内〕 アファーム乳剤　2,000倍（５mℓ／10ℓ）〔14日前まで／１回〕 カスケード乳剤　2,000倍（５mℓ／10ℓ）〔７日前まで／２回以内〕 アーデント水和剤　1,000倍（10ｇ／10ℓ）〔発生初期但し14日前まで／１回〕 のいずれかを散布する。	
生育期	オオタバコガ（ヨトウムシ）	11A UN	ゼンターリ顆粒水和剤　1,000倍（10mℓ／10ℓ）〔発生初期但し前日まで／－〕 プレオフロアブル　1,000倍（10mℓ／10ℓ）〔７日前まで／２回以内〕 のいずれかを散布する。	
生育期	ハダニ類	UNE － 6 25A	アカリタッチ乳剤　2,000倍（５mℓ／10ℓ）〔前日まで／－〕 サンクリスタル乳剤　300倍（33mℓ／10ℓ）〔前日まで／－〕 コロマイト水和剤　2,000倍（５ｇ／10ℓ）〔前日まで／１回〕 ダニサラバフロアブル　1,000倍（10mℓ／10ℓ）〔３日前まで／２回以内〕 のいずれかを散布する。	１．アカリタッチ乳剤は、うどんこ病にも登録がある。 ２．サンクリスタル乳剤は、ストロビーフロアブルとの混用及び近接散布は花弁に薬害を生じるおそれがあるので、花弁の見え始め以降は単用で使用する。 ３．アカリタッチ乳剤、サンクリスタル乳剤は1週間間隔で２～３回、十分葉に付着するように、ていねいに散布する。 ４．アカリタッチ乳剤、サンクリスタル乳剤は薬害の恐れがあるので、高温時、多湿時には散布しない。

農薬の使用にあたっては、使用回数に加え、有効成分ごとの総使用回数も定められているので遵守する。

成分名	RAC	農薬名	使用回数	同一成分総使用回数	備考
ジノテフラン	4A	スタークル粒剤	１回	３回以内	定植時土壌混和１回 散布２回以内
		スタークル顆粒水溶剤	２回以内		

除草剤使用基準

	薬剤名	RAC	10ａ当り薬量／散布量	使用時期	使用方法	使用回数	適用雑草	特性
土壌処理剤	ゴーゴーサン乳剤30	3	200～400mℓ／70～150ℓ	定植前（雑草発生前）	全面土壌散布	１回	一年生雑草	・土壌が過湿の場合は使用しない。 ・キク科雑草およびツユクサには効果が劣る。
茎葉処理剤	バスタ液剤	10	300～500mℓ／100～150ℓ	雑草生育期：畦間処理（収穫14日前まで）	雑草茎葉散布	２回以内	一年生雑草	・非選択性、スギナに効果高い

◎耕種的・物理的防除

（１）各作型共通事項

①ほ場衛生

・ほ場周囲の雑草は、病害虫の発生源となるので、除草を徹底する。
・発病した葉や株は発見次第除去し、ほ場外へ搬出し、地中深く埋没する。

②生産条件の整備

・健全生育を確保するため、ほ場全体の排水対策を行う。

③栽培基準の遵守

・親株は健全なものを使用する。
・育苗は清潔な資材を使用して、清潔な場所で行う。
・過度な密植は病害の発生を招くので行わない。

（２）ハウス早熟栽培（岩風）、夏ぎくハウス雨よけ栽培（寿）、秋ぎくハウス雨よけ栽培（山形２号、４号、もってのほか等）

①アブラムシ、アザミウマ類

・障壁

ハウスサイドや出入口の寒冷しゃ等の被覆により、ハウス内への侵入をかなり防止することができる。

・捕殺

黄色(アブラムシ類)や青色(アザミウマ類)の粘着テープや粘着板を設置し捕殺する。
設置する高さは開花位置とする。 収穫作業に支障が無いように工夫する。

・行動撹乱

施設の被覆フィルムにＵＶカットビニールを使用することにより、作物への寄生率を低下させることができる。
なお、**「もってのほか」等赤紫色の品種では花色へ影響するので使用しない。**

②ハダニ類

周辺雑草を除去すること、周辺ほ場の作物は後かたづけ前の防除を徹底することが重要である。

③花腐病、灰色かび病など

過度の窒素成分の施用は発生を助長するのでこまめに追肥して対応する。また、ハウス内の湿度が高いと発生が多くなるので注意が必要である。登録農薬が限られるので発病が助長される条件とならないように留意する。

・全面マルチ栽培
通路からの水分蒸散を防止するものであるが、設置したマルチの局部に水分がたまる場合があるので通路の均平を図る。
・通路に敷きワラを行う
ワラの吸湿性を利用するもので、いちご等で灰色かび病の発生が少なくなった事例がある。
・十分に換気を図る
こまめに換気を行い過湿を防ぐ。雨天や障害が発生するような低温時を除き換気に努める。
・発生を認めたら病花を速やかに除去し、ほ場外に搬出する。